

う。

同じことは、国家とその法律、いっさいの管理の、政府中心主義の、中央集権の全制度を廃止することが歴史的必然となっており、しかも他方の廃止なくしては一方の廃止は実質上不可能であるといわれるのを、はじめて聞く者にも起こっている。大いに注意を喚起したいことだが、教会と国家とによって、その利益のために行なわれているわれわれの教育のすべては、この考えに反抗するものである。

しかし、このために、その考えの正しさが少なくなるであろうか？ われわれが解放のために犠牲に供した数数の偏見の中で、国家の偏見は生き残るであろうか？ 賃金労働者としてとどまるかぎり、労働者は、その買手が個人であらうと国家であらうと、彼の労働力を売ることをよぎなくされる者の奴隷であることに変わりはないであろう。

民衆の精神、人間の頭脳をよぎる数多い意見のこの総和の中にもまた、もし国家が雇主に代わって労働力の買手の役割をつとめ、それを監督するならば、さらに屈わしい圧制となるであろうことを人は感じている。庶民は抽象によって推論せず、具体的な言葉で考える。それゆえ、彼らの感ずるところでは、「国」という抽象物は、工場や仕事場の仲間の中からえらびとられた多数の官吏の形を帯びている。庶民は彼らの徳をどう考えたらよいか知っている。彼らは、今日はりっぱな仲間であるが、

ロシア革命におけるクロボトキン

ロシア革命におけるアナキストの役割は、このアンソロジーのII巻で扱われることになるが、ここでこの年代順の計画を変えることが必要となった。実際、クロボトキンのさまざまな著作をあれこれ引き離さないためには、何年かをとびこえて、一九一七年十月革命後、故国に帰つてからの「アナキスト公爵」の重要な文書にいまから、手をつけるのがよいと考えたのである。

ゲオルク・ブランデスへの手紙 1919

親愛なる友よ

やっとあなたに手紙を書く機会がきました。私は急いでこの機会を利用しますが、しかしこの手紙がお手もとに届くかどうかは確かではありません。

私たち二人は、私の逮捕の噂がひろまったとき、あなたが旧友にお示しくださった親身なお心遣いに心から感謝しています。この噂は、私の健康状態についてのだらめな話と同様に、まったくの偽りだったのです。

この手紙をあなたに届けてくださるどなたかが、田舎

明日はがまんのならぬ管理者になる。そこで庶民は、新しい悪をつくりださずに現在の悪を排除する社会体制を探索する。

これゆえにこそ、集産主義はかつて大衆を熱中させたことがなく、大衆はいつも、共産主義にもどき、しかも神権政治や四〇年代のジャコバンの権威主義からいよいよ離脱して共産主義に、自由なアナキスト共産主義にもどるのである。

さらにいおう、私は自分の思想を、ヨーロッパの社会運動においてこの四分の一世紀間にわれわれが見てきたことに、たえず照らし合わせることにより、現代の社会主義はいやおうなく、リベルテール共産主義に向かって前進するものと考えざるをえないのである、と。

の小さな村で私たちが過ごしている孤立した生活のことを、あなたにお話しになるでしょう。私の歳では、革命最中に公務に参加することは事実上不可能で、また物好き半分でそれにたずさわるとは、私の性分ではありません。モスクワで過ごした去年の冬には、一団の協力者たちといっしょに、連合主義共和制の原理を作成することに働きました。しかしこのグループは解散してはなりませんでした。そこで私は、十五年ほど前イギリスではじめた倫理学に関する著述に戻っています。いま私にできるのは、ただあなたにロシアの事態について一般的な考えをお知らせすることです。これは、私の意見では、西ヨーロッパに正しく伝えられていません。ある類比がたぶん事態を説明するでしょう。

私たちはいま、フランスが一九二二年九月から一九二四年九月のジャコバン革命のさいに経験したことを通りぬけています。ただちがうのは、進路をさがしているのがいまは社会革命だということです。

ジャコバン派の独裁方法は間違っていたのです。それは安定した組織をつくりだすことはできず、当然反動に帰着するものでした。しかし、それにもかかわらず、ジャコバン派は、立憲議会も立法議会も一七八九年に着手しながら完成しようとしなかった、封建的諸権利の廃止をなしとげました。また彼らはすべての市民の政治的平等を声高く宣言しました。これらは、十九世紀中にヨーロッパを一巡した二つの基本的変革です。

それに類する事実がロシアに起こっています。ボリシエヴィキたちは、社会民主党の一分派の独裁によって、土地、産業および商業の社会化を導入することにとめています。彼らが達成しようと努力しているこの変革は、社会主義の基礎的原理です。不幸にして、彼らが強力に中央集権化された国家の中で、バブーフのそれを思い出させる共産主義を、無理に打ち建てようとする方法は、民衆の建設的作業を麻痺させることにより、その成功をまったく不可能にします。これは私たちに對して猛烈な、たちの悪い反動を準備するものです。反動は、最初戦争により、ついでわれわれが中央ロシアで蒙っている饑饉により、また法令で遂行されるこのように大規模な革命の最中には避けることのできない交換と生産のまったくの混乱によって生み出された、一般的な極度の疲弊を利用して旧体制を復帰させるため、すでに自らを組織化しようとつとめています。

西ヨーロッパでは現在、連合国の武力干渉によってロシアに「秩序」を確立することを語っています。ところがロシアの抵抗力を打ち壊そうとする人たちの態度が、私の考えでは、ヨーロッパの社会的進歩全体に對してどんな罪を犯すことであつたか、あなたはご存じです。これは戦争を一年引き延ばし、条約にかこつけてドイツ軍の侵入を私たちにもらし、征服者ドイツが帝国の長靴の下にヨーロッパを粉砕するのを防ぐため、多量の流血を払わせました。これに關して私が何を感じているか、

が起こっています。全世代が衰弱しています。しかも私たちは、西ヨーロッパでパンを買う権利を拒否されています。——なぜなのか？ ロマノフ王朝を私たちに復活させるためでしょうか？

ロシアのいたるところで製造品が不足しています。農民は鎌、斧、数本の釘、針、メートル尺、どんな布地にも途方もない代価を払い、ひどいロシア四輪荷車の鉄輪四つに千ルーブル（かつては二千五百フランでした）も払っています。ウクライナでもっと悪く、どんな値段でも商品は見つかりません。

連合諸国は、一七九三年に、オーストリア、プロシア、ロシアがフランスに對して演じた役割を演ずるかわりに、ロシアの民衆がこの恐るべき状態から抜け出るように、全力を尽くして援助すべきでしょう。しかるに、人々はロシアの民衆を過去に立ち戻らせるためには血を流していますが、これには成功しないでしょう。連合国が私たちにすべき援助は、新しい生活の建設を入念に仕上げて新しい未来を建設することであり、この新しい生活は、あらゆる障害にもかかわらず、すでに現われています。すぐに、私たちの子供を助けに来てください！ 私たちの必要な建設をご援助ください！そしてこのために、よこしていただきたいのは、外交官や将軍ではなく、パンと生産用具と組織者たちです。組織者というのは、あの恐ろしい五年間に連合国を助け、経済的崩壊を防ぎ、ドイツ軍の野蛮な侵略を撃退することをかくもみ

あなたはよく知っておられます。

しかし私はロシアの問題に對する連合国の武力干渉には全力をあげて抗議します。この干渉はロシアの排外主義の発作という結果になるでしょう。それは、私たちに盲目的愛國主義の君主制を復活させ——そのいくつかの徴候はすでに見えています——また、この点をよくご注意ください、ロシアの民衆全体の間には西ヨーロッパに對する敵対的な態度を生み出し、この態度は最も悲しむべき結果をもたらすでしょう。アメリカ人たちはすでにこのことを非常によく理解しました。

人々はおそらく、コルチャック提督やデニキン將軍を援助することによって、共和主義自由派を支援しているものと考えているでしょう。しかしこれがすでに間違っています。これら二人の軍司令官の個人的意図はどのようなものであるにしても、彼らの周囲に集まる者たちの大多数は別の目的をいだいています。彼らが私たちに私たちのものは、必然的に、君主制への復帰、反動、流血でしょう。

したがって、事件を明瞭に見てとる連合国の人たちは、あらゆる武力干渉を拒否しなければなりません。彼らは、本當にロシアを援助しようとしているだけにあなたのこと、別の方向においてなすべき多くのことを見出すでしょう。

私たちは中部および北方諸州の広大な地域でパンが欠乏しています。これはまさに饑饉で、そのあらゆる結果

ごとに行なった人たちのことです。

もうだいぶ長いものになりましたので、この手紙を終わりにしなくては、と気がつきました。友愛の抱擁をもってペンをおくことにします。

共産主義はどのような方法で招来されてはならないか

西ヨーロッパ労働者への手紙

〈ドミトロフ、モスクワ管区、一九一九年四月二十八日〉

私は西ヨーロッパ世界の労働者に宛てメッセージを送ってはどうかと求められた。たしかに、ロシアにおける現在の出来事については、語りたいこと、学ばべきことが多いのである。メッセージは長いものになりそうなので、ただ若干の主要な点だけを指摘することにしよう。まず初めに、文明世界の労働者および彼らの他の階級の友人たちは、彼らの政府に、ロシアの問題に對する武力干渉、それが公然であれ仮装したものであれ、軍事的であれ他国への援助の形においてであれ、そうした考えをいっさい放棄させなければならない。

ロシアはいま、イギリスが一六三九—一六四八年に、フランスが一七八九—一七九四年にそうであったのと同じように深刻な、また重大な革命を経過している。いずれの国民も、フランス革命の間にイギリス、プロシア、

オーストリア、ロシアが、それに身を落としたとき恥ずべき役割を演ずることを拒否すべきである。

さらに、ロシア革命は、労働と技術的熟練と科学知識とを合わせた努力をもってする生産のすべてがごとく共同社会自体に帰属する社会を建設することを求めており、党派の闘争におけるたんなる一エピソードではないことを考慮しなければならない。この革命は、ロバート・オーウェン、サン・シモンおよびフーリエの時代いらい、一世紀に近い共産主義や社会主義の宣伝によって準備されたのである。また、一党派の独裁によって新しい社会を招来しようとする企ては、おそらく失敗を宣告されているにしても、革命はすでにわれわれの日常生活に、労働の権利、社会における労働の真の地位、および各市民の義務に関する新しい諸概念を導入し、これらは永続するであろうことを認めなくてはならない。

文明諸国の労働者のみでなく進歩的分子はすべて、彼らがこれまで革命の敵たちに与えてきた支持をやめるべきである。ボリシェヴィキ政府のやり方に抗争すべきものが何もないというのではない。まったくそれどころではない！だが、外国の武力干渉は、すべて必然的に統治者の独裁的傾向の強化をそのかし、政府から独立してロシアが自己の生活を再興するのを助力しようとしているロシア人たちの努力を妨げるのである。

したがって、党の独裁に固有な諸害悪は、この党がその中で己れを維持する戦争状態によって増大された。戦

ア、ウクライナ、グルジア、アルメニア、シベリア等々を一つの中央からの法律の下に統一しようとする努力は、失敗することは確実である。それゆえ、西ヨーロッパ諸国は、旧ロシア帝国の各部分の独立の権利を承認する旨を宣言することが有益である。

私の見解では、このような発展が継続するであろう。私は近い将来、この連合体の各部分がそれ自体、農村および都市コミュニティの連合体となる時がくるであろうと見ている。そしてさらに私は、西ヨーロッパのいくつもの地方も、やがてこれと同じ運動の方向をたどるであろうと考えている。

われわれの現在の経済的および政治的事情についてはどうかというと、ロシア革命は、イギリスおよびフランスの二大革命の継続であり、フランスが人々のいう事実上の平等、すなわち経済的平等をりっぱになしとげるにいたったときに停止した地点に、進もうとつとめてい

る。不幸にしてこの企てがロシアでは、一党すなわちマキシマリスト社会民主党(ボリシェヴィキ)の強力に中央集権化された独裁の下で行なわれた。これが、極度に中央集権的、ジャコバン的なブーフィの陰謀と同じ仕方であつたのである。私の意見では、強固に中央集権化された国家共産主義を基礎にし、一党独裁の鉄の規律の下に共産主義共和制を打ち建てようとするこの企図は、失敗に終わろうとしていることを、諸君に率直に語らなければなら

争状態は、党の独裁方法ならびに生活のあらゆる細部を政府の手に集中する傾向を強化する口実だったのである。このことは国民の日常活動の広大な部門を停止させる結果となった。国家共産主義の当然の害悪が、われわれの生存の苦難のすべてが外国の干渉によるものであるという口実の下に、十倍にもされた。

私はさらに、連合国の軍事干渉がつづくならば、それは必ず、ロシアに西ヨーロッパ諸国に対する苛烈な感情をつのらせ、この感情はいつか将来の紛争に利用されるであろうことを指摘しなければならない。その荒々しさは、すでに広がっているのである。

要するに、西ヨーロッパ諸国は、ますますにロシア国民と直接交渉にはいられなければならないのである。そしてあなた方、あらゆる国の労働者階級および先導的諸分子も、この見地に立つて発言すべきである。

全般的な問題についてもう一言つけ加えよう。ヨーロッパおよびアメリカの諸国とロシアとの間の関係の確立は、ツァー帝国を構成した諸民族に対するロシア国民の優位をなんら意味しない。帝制ロシアは死滅し、復活することはないのである。その諸地方の将来は、一つの大きな連合体を指向するであろう。この連合体の各部分の自然的領域は、われわれのうち、ロシアの歴史、その民族誌や経済生活に明る者たちはよく知っているように、まったくまちまちなのである。ロシア帝国を構成する諸部分、フィンランド、バルチック諸地方、リトワニ

ない。われわれはロシアにおいて、旧体制のために疲弊し、新支配者たちの行なう試みになんら積極的な反抗をなす力のない国民においてさえ、どのようなやり方で共産主義を招来してはならないかを知ることを学んでいる。ソヴェト、すなわち労働者および農民の評議会という考えは、最初一九〇五年の革命的企図のさいにかつぎだされ、一九一七年二月革命により、ツァー帝制が覆えされるとすぐに実現されたのであるが、政治および経済生活を管理する評議会というのは重要な観念である。これは必然的に、国の富の生産に自己自身の努力をもって現実に参加するすべての者によって構成されなければならないという考えに導くがゆえに、いっそう重要である。

しかし、一国が一党の独裁に支配される間は、労働者および農民の評議会は明らかにそのすべての意義を失うことになる。それらは昔、三部会と議会在、国王に召集されて全能の王室会議と聞わなくてはならなかったときに演じたと同じ消極的役割を果たすだけのものにされる。

労働者評議会は、国内に出版の自由が存在しないとき、自由かつ真実の忠言者ではなくなる。われわれは、戦時状態にあるという口実の下に、二年近くこのような事情におかれていたのである。これだけではない。労働者および農民の評議会は、その選挙が、自由な選挙戦の手続きで行なわれず、一党独裁の圧力の下でなされると

きにも、その全意義を失ってしまふ。当然のことだが、これについていつも持ち出される口実は、旧体制と戦う手段としては独裁的な規律を避けえないというのである。だが、そのような規律は、革命が新しい経済的基礎の上に新しい社会を建設することに専心するにいたるやいなや、明らかに後退となる。それは新しい建設に対する死の宣告となる。

すでに病んでいる政府を顛覆する手段方法は、古代および近代の歴史によってよく知られている。しかし、手本とすべき実例なくして生活の新しい形態、とくに生産と交換の新しい形態をつくり出すことが必要であるとき、即座にすべてが建設されなくてはならないとき、住民一人一人にランプの油とマッチまでも供給することをもちろむ政府が、その官吏の数はいくら限りなく多からうと、彼らに、それをまったくやらせないことがわかるとき、この政府は有害になる。それは、嵐で国道に倒れた木を売るのに四十人も官吏の関与を必要としたフランスの官僚制も、それにくらべるとるにたらしめほどの、恐るべき官僚制を發達させている。これが今日ロシアにおいて、われわれが知っていることである。そしてこれこそは、西ヨーロッパの労働者諸君が、社会再建に強い関心を抱く以上、あらゆる手段をつくして回避することができ、また回避しなければならぬことである。社会革命が実生活の中にどのような活動しているかを見るため、諸君の代表をこちらへ派遣されるとよい。

共感、諸君がロシアにおける諸国民の国際団体の新しい一員を喜んで迎えていることを示すものである。そして諸君はやがて必ずや、ロシアができるかぎり早く現在その發展を麻痺している諸条件から脱出することが、全世界の労働者の利益であることに気づくであろう。

なお若干のことはをつけ加えよう。最近の戦争は文明世界における新しい生活条件の端緒となった。社会主義は確かに著しい進歩をとげ、より独立した新しい生活形態が、地方的自由と建設的創意とを基礎として創り出されるであろう。それらは、文明諸国民の知的な部分が不可避的な再建に協力しない場合にも、平和的な仕方もしくは革命的手段によって創出されるであろう。

しかしこの再建の成功は、諸国民大部分の間の緊密な協力の可能性に依拠するであろう。この目標を達するには、すべての国の労働者階級が緊密に結合し、世界の全労働者の大規模なインターナショナルという考えが、第二インターナショナル、また第三インターナショナルの場合までもそうであったように、単一政党に支配された団結の形態としてではなしに、再び生かされなくてはならない。そのような団結も、当然十分な存在の理由をもっているが、それら以外に、またそれらすべてを結合するものとして、世界の全労働組合と、世界の生産を現在の資本への従属から解放するために結合して、世界の富を生産しているすべての人々の団結が存在しなくてはならないのである。

社会革命が必要とする巨大な建設事業は、中央政府によって成就することはできない。たとえそれが、若干の社会主義や無政府主義の提要よりも実質的に優る何かを手引きにするとしても、そうである。それには、知識と頭脳と、彼らのみが多様な経済問題にその地域的様相にに応じて首尾よくとりくむことのできる多数の地方的および専門的諸勢力の自発的協力とが必要である。この協力を斥け、党独裁者の天才を頼りとすることは、労働組合（ロシアでは職業組合とよばれている）や地方の協同組合のごとき独立の核を破壊し、それらを党官僚制の機関に変えることであり、これが現在の事実である。だが、これは、革命を達成する手段ではなく、その実現を不可能にする手段である。これゆえにこそ、私はこのような方針を借りることに對して諸君に警告することを自分の義務と考えるのである。

あらゆる民族に対する帝国主義的征服者たちは、旧帝制ロシアの諸民族がなるべく長く経済的困窮状態にあり、そのため、西部および中部ヨーロッパに原料を供給するのを余儀なくされ、その間西ヨーロッパの産業が、さもないとロシアが自己の労働から引き出したかもしれない利益のすべてを受け取るのを、望むことができる。しかし、ヨーロッパおよびアメリカの労働者階級ならびに知的中心は、暴力のみがロシアをこの屈從に維持することとができること、確かに考えている。これと同時に、われわれの革命がロシアとアメリカのいたるところで出会う

ヴィルキンズの最後のクロボトキン訪問 1920/12

クロボトキンは七十八歳である。高齢にもかかわらず、考えはすべてに明晰であった。歩行も私たちみんなと同じように身軽である。記憶は無尽蔵である。彼は私たちにパリ・コミューンの時のことを語り、あたかも昨日の出来事であったかのように、細ごましたことをいちいち引き合いにする。彼はまた、青年時代、シベリアや中国国境を探検したときのエピソードを、若い学生のように快活に話してくれる。

……会談はいまやロシア革命が中心になる。クロボトキンは、共産主義者たちが彼らのやり方で民衆を共産主義への道に就かせるかわりに、ついにはその名称さえも憎まざるにいたるであろうことを、これまで以上に強く確言する。

彼らはおそらく真摯であろう。だが彼らの方式は、共産主義のいささかの原理をも、実際に導きいれるのを妨げている。そして彼らは、革命の事業が少しも前進しないのを見て、そのことから、「民衆は彼らの法令を呑みこむ用意ができていない、時を待ち、廻り路をする必要がある」と推定する。これは論理的であり、政治革命の歴史はくりかえされる。最も悲しむべきことは、それら革命が己れの過誤を認めず、また認めまいとすることであり、革命の戦利品の一片をも日々大衆から取りあげ

て、中央集権国家のために利用していることである。とにかく、クロボトキンの語るところでは、革命の経験はロシアの民衆から失われはしない。それはよみがえり、よりよい運命に向かって進んでゆく。革命の四カ年は、民衆を自覚させるのに、無為にすぎず一世紀以上のことをなすという。

——あなたは革命の将来についてどうお考えですか？ またあなたのご意見では、どのような勢力が共産主義者に有効にとつてかわることができでしょうか？

——ボリシェヴィキを支持している大衆の漠たる抵抗をあまりあてにしてはなりません。ボリシェヴィキ自身、その方法のために、大衆を彼らから無関心にさせてはいます。しかし彼らは強力な軍の装置を駆使し、これは訓練を基にブルジョア軍隊と同じ役割を演じています。とにかく、ボリシェヴィキは、むしろ彼ら自身の落度によって倒れるでしょうし、またその政策によって、協商国(フランス、イギリス、ロシヤ)は、それぞれ白軍の利益をはかり、民衆の恐れる反動を容易に呼び起こしています。

——もし不幸にしてそうしたことになりましたら、あなたは反動の力が確固不動なものになるとお考えですか？

——私はそう思いません。それはせいぜい数年はつづくことはできるでしょうが、民衆は、一時は打ち倒されても、必ずや反撥し、新たな革命が起こり、ヨーロッパ革命の実現と共同して前進するでしょう。

イが特別な種類のサラダ用野菜を植えた一隅に連れて行った。彼女は、ちぢれた葉のおいしい、頭ほどもあるキヤベツを見事に収穫したということであった。彼自身鋤で畑を耕すこともあるが、本当の専門家はソフィだとかえしいった。去る冬のジャガイモの収穫は非常に良かったので、牝牛の糞と交換したり、野菜の少ないドミトロフの隣人たちに分けてやるほど残りがあったという。私たちの親しいビートルは、彼の菜園でこうしたことをしようだんめかして、世界的な出来事であるかのように話すのであった。わが同志の若々しい精神は感染し、私たちみんなを彼の魅力と快活の中に引き入れた。その日の午後、書斎で彼は、人物と事件についての判断という点で明晰かつ透徹した学者兼思想家にかえた。私たちは独裁や必然的に革命に強制される手段方法、また党というものの本性に固有するそれらについて論じた。私はビートルに、革命と大衆とに対する私の信頼を崩す恐れのある事態を、もっとよく理解するのを助けてくれるよう望んだ。彼は、根気よく、また病気の幼な子に惜し気もなく与えるようなやさしきで、私の心を静めようとした。彼は失望する理由はないと確言していた。私の内心の葛藤は理解できるが、必ずや時がたつにつれて革命と体制とを区別することがわかるにちがいない、と彼はいった。これらは別個な二つの世界であって、その間の深淵は、時とともにますます深まらざるをえない。ロシア革命はフランス革命以上に広大であっ

——ところで、現在の革命に対する世界プロレタリアートの態度はどうあるべきでしょうか？

——むろん擁護を、それも、もはや言葉ではなく行動をもってつづけることです。なぜかというところ、ブルジョアの敵意は、労働者の断固たる態度に比例して低下するからです。これは、世界のプロレタリアートにとってよりよい革命訓練になります。しかし革命の擁護を偶像崇拜と混同してはなりません。世界のプロレタリアートはロシアの実例を追い越し、大衆の有効な参加に対するいっさいの障害を除去し、誤った公式で大衆がだまされるままにしてはならないのです。

エマ・ゴールドマンのクロボトキンの思い出

私たちの老同志ビートル・クロボトキンが肺炎で倒れたという知らせをドミトロフから受け取ったとき「私たちはモスクワにいた」その前年の七月ビートルを訪れ、健康で上機嫌なのを見ていただけに、衝撃は大きかった。その年の三月に会ったときよりも若く、体の調子がよいようであった。眼光の輝きや敏捷な動作は、上々な状態にあることを示していた。その敷地は、夏の太陽にありとある花を咲かせて心を奪い、ソフィ(クロボトキンの妻)の菜園も花盛りであった。ビートルは妻のことや彼女の野菜作りの腕前のことを、たいへん自慢して話した。彼はサーシャと私の手を取り、子供のように元気に、ソフ

て、その意義も全世界にとってより強かったのである。それはいたるところで大衆の生活に跡を残し、人類がそれから取り入れようとする収穫は、だれも予想しえないほどである。中央集権国家の観念に決定的に固執している共産主義者たちは、革命の針路を誤った方向に導いたとして非難された。彼らは、目的が政治的覇権であったため、不可避的に社会主義のイエズス会士となり、彼らの目的を達するためにはあらゆる手段を正当化した。彼らのやり方は大衆のエネルギーを麻痺させ、人々をおびやかした。しかし民衆をぬきにし、国の再建への労働者の直接の参加なしには、創造的、本質的なことは何一つ達成されないのである。

われわれ自身の同志たちは、とクロボトキンはつづけた、社会革命の基本的諸要素に対して十分な考察を払うことを怠ってきた。このような叛乱における基礎的な要因は、国の経済生活の組織化であった。ロシア革命は、われわれがこれに備えなくてはならないことを証明した。結論は、おそらくサンジカリズムが、ロシアに最も欠けたもの、すなわち国の経済・産業の建設を実現しうる手段を提供するであろうということであった。彼はアナルコ・サンジカリズムを信頼し、これこそは、協同組合の助力の下に、ロシアがいま経過している致命的な過誤と恐るべき苦しみから将来の革命を救うであろうと指摘した。

私はクロボトキンの病氣という悲しい知らせを受け

て、こうしたことをありありと思い出した。私は再びピョートルに会わずにベトログラードに立つことなど考えられなかった。有能な看護婦はロシアでは少なかった。私は彼の面倒をみ、少なくともこれを親密な師と友のためにそうすることができようであらう。

私は、ピョートルの娘アレクサンドラがモスクワにおり、ドミトロフに向かって出発する仕度をしていることを知った。彼女は、非常に有能な、イギリスで勉強したロシア人の看護婦が看護していることを知らせてくれた。彼らの小さな別荘はもう人で一杯なので、少しの間でもピョートルの気を乱さないほうがよいと彼女は私にいった。彼女はドミトロフに向けて立ち、父の健康状態と私の訪問がどんな役に立つかについて電話してくれることになった。

私が「ベトログラードに」着くとすぐ、ラヴィチ夫人が電話でドミトロフでは人々が私を、至急に呼んでいることを知らせてくれた。彼女は、私に急ぎ来るようにというモスクワからの知らせを受け取ったのであった。ピョートルの病気が悪化し、家族の者が、私にただちに来るようにと頼んだのであった。

私の乗った汽車は、ひどい雪あらしに襲われ、時間表より十時間おくれでモスクワに着いた。翌日の夕方までドミトロフ行きの汽車はなく、道路は多量の雪に閉ざされ、自動車は通れなかった。電信線は接地していたし、ドミトロフに達する手段はなかった。

私は、共産党の独裁によって窒息せしめられてしまった。

ピョートルはどのような政府の恩恵をも求めず、受入れさえもしなかったし、いかなる奢侈、いかなる栄華も黙認しなかった。したがってわれわれは、彼の埋葬には国家のいかなる介入もあるべきではなく、官吏の参加によって低められてはならないと決定した。ピョートルのこの地上における最後の数日は、同志だけの間で過ごされなければならなかった。

シャビロとバヴロフは、サーシャとベトログラードの同志たちを探しにモスクワへ出発した。彼らはモスクワのグループといっしょに葬式の仕事にとりかからなくてはならなかった。私は、ソフィが故人を埋葬のため首都に移すの手伝うためにドミトロフに残った。

……病床に就かざるをえなくなった日まで、ピョートルは、この上もなく困難な条件の中で倫理学に関する著述の仕事をつづけた。彼はこれが生涯の総仕上げになることを望んでいた。彼の晩年の最大の悲しみは、何年も前に始めたこの著述を完成するには、あと少しの時間しか与えられていないことであった。

生涯の最後の三年間、ピョートルは、大衆とのあらゆる接触を断たれていた。死において再び、彼らとのこの接触を十分に取り戻した。農民、労働者、兵士、知識人と、何キロもの範囲にわたる男女が、クロボトキンの別荘とドミトロフ村中に溢れた。彼らは、彼らの間で生

夕方の汽車はいらいらさせるほどのろのろと走り、ときどき燃料補給のために停止した。朝四時に到着した。私は、クロボトキン家の親しい友人アレクサンドル・シヤビロおよびパン屋労働組合の同志バヴロフといっしょに、クロボトキンの別荘へ急いだ。ああ！遅かった！ピョートルは一時間前にこゝに切れていた。彼は一九二二年二月八日、朝四時に死んだのである。悲しみに沈んだ未亡人は、何度も、私が出発したか、いつ着くかときいたと話した。ソフィは倒れんばかりで、私は彼女のことと気をつかわなければならなかったおかげで、私の生涯と仕事にかくも力強い衝撃を印したかたのために、少しでも尽くすことを不可能にしたいくつも事情の残酷なめぐり合せを忘れた。

ソフィが知らせたところによると、レーニン、ピョートルの病気のことを知られると、モスクワ最高の医師たちや食料品、病人用の滋養食をドミトロフに運じたということであった。彼はまたピョートルの病状について頻繁な報告書を送り、それを新聞に発表するように命じた。そのような心尽くしが、二度もチェカの手入れを受け、このため心ならずも引退せざるをえなかった人に、死の床で与えられるとは、なんとという悲しい大詰めであらう！ピョートル・クロボトキンは、革命への地ならしをするのに助力した。しかし人々は、彼が革命の生命と発展に参加するのを拒んだ。彼の声はツァー帝制の迫害にもかかわらず、ロシアに鳴り響いた。しかしそ

き、彼らの闘いと困苦とを分かち合った人に、最後の敬意を表するためにやってきたのであった。

サーシャは、ピョートルの遺骸をモスクワに移す手助けをするため、モスクワの多数の同志といっしょにドミトロフに到着した。この小さな村は、かつてピョートル・クロボトキンにこれほど大きな敬意を表したことはなかった。子供たちは彼を最もよく知っており、その快活な若々しい性格のために彼を好いていたのであった。学校は、この日彼らのもとを去った友だちへの弔意を表して休校となった。子供たちは大ぜい駅に集まり、汽車が動き出すと、手を振ってピョートルに別れを告げた。

途中、私はサーシャから、彼がその組織に助力し、その会長となったクロボトキン葬儀委員会が、早くもソヴェト当局のなんども及ぶいいがかり的になっていることを聞いた。彼らは委員会に、ピョートルのパンフレット二種とピョートル・クロボトキン記念の報告特集号を出すことを許可した。そのあと、カメネフを議長とするモスクワ・ソヴェトは、この報告の原稿を検閲に提出することを要求した。サーシャ、シヤビロ、およびその他の同志たちはこれに抗議し、そのような手続きは出版をおくらせることになるといった。時をかせぐため、彼らはこの報告にただクロボトキンの生涯と著作に関する評価だけを発表することを約束した。ついで突然、検閲係は、彼がやりかけの仕事があまりに多く、その件は正規の順番を待たなくてはならないことを思いついた。

このことは、報告書が埋葬の時には出版できないことを意味し、ボリシェヴィキが、おくらせてその効果をなくするという、いつもの延期策に出たことは明らかであった。わが同志たちは直接行動を決意した。レーニン、このアナキズム思想をしばしばわがものとした。なぜ、アナキストたちはそれを彼から取り戻さないのか？ 時は切迫しており、目的は逮捕の危険さえも冒すほどに重要であった。彼らは、チェカがわれわれの古い同志アタベキアンの印刷所に貼った封印を破り、葬儀に間に合うよう報告書を作成し出版することに懸命に働いた。

ビョートル・クロボトキンに対する敬愛は、モスクワにおいて巨大な示威運動の形で表わされた。遺骸が着き、労働組合会館に移されて、故人が大理石の広間に安置されていた二日の間に、十月の日々以来、かつて知られなかったほどの人々の行列がつづいた。

クロボトキン委員会は、レーニンに請願書を送り、モスクワで投獄されているアナキストたちを一時釈放し、彼らが師にして友たる故人に最後の敬意を表するのに参加できるようにすることを求めた。レーニンはこれを約束し、共産党執行委員会はヴェ・チェカ（ロシア・チェカ）に、獄中のアナキストを葬儀に参列するため「その裁量により」釈放することを命じた。ところが、ヴェ・チェカは、レーニンであろうと党の最高権威であろうと、命令に表面向き従うまいとした。それは委員会に囚人の監獄帰還を保証することを要求した。委員会は共同の

保証を与えた。すると、ヴェ・チェカは「モスクワには投獄されたアナキストはいない」と言明した。実は、プーティルキイ監獄とチェカ内の監獄には、ハリコフ会議の手入れのさい捕えられた同志たちがいっぱいいた。しかも、この会議はソヴエト政府とネストル・マフノとの協定で、公式に認められていたのである。それに、サーシャがプーティルキイ監獄に入る許可をとり、そこで二十名以上の投獄された同志たちと話をした。また彼は、ロシアのアナキスト、ヤルチュークに伴われてモスクワのチェカ内の監獄を訪れ、ア・ロン・パロンと話を交した。パロンはこのさい投獄された他の多数のアナキストを代表する一人に過ぎなかった。しかるにチェカは、「モスクワには投獄されたアナキスト」はいないとい張った。

ふたたび委員会は直接行動に訴えることをよびかけた。葬式の日の朝、それはアレクサンドラ・クロボトキンに、モスクワ・ソヴエトに電話し、もしもレーニンの約束が守られないならば、この食言と、ソヴエトや共産主義者の諸組織によって与えられた栄誉が取り上げられたことになることを公表する旨を、告げることであった。円柱の大ホールは超満員であった。参列者の中にはヨーロッパおよびアメリカの新聞の多数の代表者がいた。私たちの旧友ヘンリ・アルスパークも、最近ウクライナから来たばかりでそこにいた。もう一人のジャーナリスト、アーサー・ランサムは『マンチエスター・ガーディ

アン』を代表していた。彼らがソヴエトの食言を知っていることは確かであった。ソヴエト政府が、病氣中のビョートル・クロボトキンに示した配慮と鄭重な扱いは全世界に知らせてよいときだけに、そのようなスキャンダルは、何としてでも避けなくてはならなかった。そこでカーメネフは、猶予を求め、二十分以内にアナキストを自由にすることを公式に約束した。

埋葬を一時間おくらすことにした。葬列についていた多数の人々は、偉大な故人の獄中の弟子たちの到着を街路で待ちながら、モスクワの厳寒にふるえていた。ついに彼らはやってきた。しかしみなチェカの監獄からきた七名だけであった。プーティルキイ監獄の同志は一人もいなかった。この最後の時になってもチェカは、彼らが釈放され、ここへ来る途中であると保証した。許されて来た四人たちが柩の掛布の紐を支えた。彼らは悲しい誇りをもって、同志の、また愛する師の遺骸を運んだ。街頭に集まった多くの人々は、印象的な沈黙で遺骸を迎えた。武装していない兵士、水兵、学生、子供、あらゆる職種を代表する労働組合組織、知識人を代表する男女グループ、農民、赤や黒の旗をかかげる多くのアナキスト・グループ、強いられずに統一し、命令されずに秩序だっている無数の人々、こういふ人たちが、二時間、長い列をなして市の近郊のドヴィシイ墓地に進んで行った。

トルストイ博物館では、ショパンの葬送曲の調べとヤ

ースナヤ・ポリヤナの予言者の門弟たちのコーラスが、葬列をむかえた。感謝のしるしに、同志たちは、ロシアの生んだ偉大な人間に対するもう一人の偉大な人間の敬意を表するため、彼らの旗を下げた。プーティルキイ監獄の前を通り過ぎるとき、葬列は再び立ち止まり、金網の窓越しに別れをしている勇敢な同志たちへのビョートル・クロボトキンの最後の挨拶として、われわれの旗が傾けられた。深い悲しみのおのづからなる表現が、さまざまな政治的傾向を代表する人々の、わが同志の墓に向かって述べた演説の特徴をなしていた。その基調は、クロボトキンの死が、もはやわれわれの国に存在しないほど巨大な道徳的な力の喪失であるというのであった。

ベトログラードに着いてから初めて、私は公衆の前で話をするようになった。私の声は妙に力なく、ビョートルが私にとってなんであったかのすべてをいい表わすことができなかった。

彼の死がもたらした苦痛は、革命の失敗に対する私の失望と結びついており、この失望はわれわれのうちの何びとも避けえなかったものである。

日はゆるやかに地平線に姿を消し、くすんだあかね色に浸された空が、ビョートル・クロボトキンの永遠の休息の地をいま覆う、生き生きとした大地の上に、不思議な天蓋をなしていた。

口約束によって出獄した七人の囚人は、その晩を私た

ちといっしょに過ごし、夜おそくなつてから監獄に戻った。彼らの帰りを待たずに監守は門を閉じ、引き上げた。人々はほとんど無理に入らなくてはならなかった。監守たちは、アナキストが同志のやった口約束を守るほど愚かなのを見て、すっかり驚いたのである。

ブーティルキイ監獄のアナキストたちはついに埋葬式に参列しなかった。ヴェ・チエカは、参列できるようにしたのに、彼らはこれを拒否したと委員会にいい張った。これが嘘であることは私たちが知っていた。だが、それにもかかわらず、私は自分でわが囚人たちを訪れ、一部始終に関する彼らの説明を聞こうと決心した。これにはチエカの許可を求めるといふ嫌なことが必要であった。私は主任チエカ職員の私室に連れて行かれた。彼はまったくの若者で、腰に拳銃をつけ、テーブルにも拳銃を置いていた。彼は私に手を差し出し、仰山に「親愛な同志」といった。彼はブレンナーという名で、アメリカに住んだことがあるといった。彼はかつてはアナキストであつて、当然サーシャや私のこと、合衆国での私たちの活動のこともたいへんよく知っていた。むろんいまは共産主義者といっしょにやっているが、その理由は、彼の説明によると、現在の体制をアナキズムへの前進の一步と考えているからというのであった。重要なことは革命であり、ボリシェヴィキは革命のために働いているのだからということで、彼は彼らに協力していたのである。では私は、彼の支持者の一人が差しのべる友愛の手

をとることを拒んだために、革命家ではなくなったのであろうか？

私は彼に、生涯かつてアナキストであつた刑事や、まして警察官と手をつないだことはなく、ここへは監獄の中へ入る許可を得て来たのであつて、これがとおるかどうか知りたいのだといふ。

……彼は立ち上がった部屋から出て行つた。私は半時間ほど、自分が囚人になつたのではなからうかといふかりながら待っていた。ロシアでは誰もが順番で、私がさうでないわけがあるのか？ 突然、人の近づく足音がし、入口が大きく開かれた。明らかにチエカ職員である老年の人物が、私にブーティルキイ監獄に入るのを許可した。

投獄されていた多数のアナキストの中で、私が合衆国で知った何人にも出会つた。フアニイおよびアロン・バロン、ヴォーリン、アメリカで活動した他の人々や、私がハリコフで会つたナバト組織のロシア人たちであつた。彼らのいうところによると、ヴェ・チエカの代表者がやってきて、委員会との取りきめで、彼らのうちの何人かを個々には釈放するが、集団としては釈放しないと申し出たという。同志たちはこの違約に反対し、グループとしてクロボトキンの埋葬式に参列することを主張し、それでなければ参列しないといふ。彼はその要求を上官に伝え、最終決定をもつてすぐ帰ると言明した。ところが、彼は二度と帰らなかつた。これは何も大した

ことではなかつた、と同志たちはいふ。なぜなら、彼らは監獄の廊下で、彼ら自身のクロボトキン記念集会を催し、その場に應じた演説や革命歌で彼を称えたからであつた。彼らは、その他種々の方策を用いて監獄を民衆の大学に変えた、とヴォーリンは私に話した。彼らは科学、経済学、社会学、文学の講義をやり、囚人たちに読み書きに対する共通の権利を教えた。実際、彼らは外の私たちよりも自由であり、私たちの方が彼らを羨まなくてはならないとじょうだんをいふ。だが、この碇泊所が長くは続かないことを彼らは恐れていた。

1 ネットラウについては本書二〇四ページを見よ。

2 『革命家の思い出』(一九〇二年(初版)『革命家の思い出』Revolutionist, 1899. 邦訳、大杉栄訳『革命家の思い出』春陽堂、高杉一郎訳『ある革命家の思い出』平凡社、一九〇二年のロシア語版からの補遺と注を加えたより完全な版はアメリカから出つた James Allen Rogers の編集したものである——訳者)

3 ラウフについては本書二〇三ページを見よ。

4 Paul Brousse (1844—1912) 医師。最初アナキストで、ターニンの弟子、ジュラ連合員。一八七七年ジョー・ド・フォンで、クロボトキンとともに「われら国際的密闘」と称する秘密結社を創立した。これはさまざまな出身のインターナショナルリストからなり、ターニンが一八六五年に創建した秘密友愛団(本書一四〇ページ)を引きつぐも

のであつた。ブルースは一八八〇年アナキズムから改良的社会主義に転じ、「現実主義」(ポズビリズム)に与した。これは日和見主義の婉曲な表現である。

5 本書二七六ページを参照せよ。

6 『倫理学・その起源と発達』はクロボトキンの死後、未完のまま出版された。(ロシア語版一九二三年、その後あいついで諸外国語に翻訳された——訳者)

7 ジュラ集会(一八七九年十一月一日)におけるルヴァシヨフという偽名で、ピョートル・クロボトキンの報告。ジュネーヴ「ル・レヴォルト」誌に発表。

8 ソンヴィリエ支部と、サン・ティエミエ溪谷地域の諸支部に属する二十名ほどの者とが合同して一八六八年九月一日に創立。アデマル・シュヴィツゲルは、すでにバーゼル大会(一八六九年)に、この連合の歩みについて報告を提出していた。

9 マックス・ネットラウ『アナキズムの文献目録』五八ページ。

10 一八八〇年十月十七日「ル・レヴォルト」に掲載。

11 Elisée Reclus (1830—1903) 地理学者、アナキズム理論家、とくに「進化、革命とアナキストの理想」(一八九八年)で著名。

12 本書二七〇—二七五ページ、「アナキーと共産主義」を見よ。

13 ビスマルク宰相による社会民主主義政党弾圧時代(一八七八年以後)へのあてこすり。

14 ピョートル・クロボトキン『叛逆者の言葉』(一八八五年)より抜萃。(三浦精一訳、三書房)

15 ダニエル・ゲラン『現代のアナキズム』(一九六五年)(江

リ・クラーク・フリックを射ったが、けがは軽いものであった。彼は、一八九三年三月一日、二十一年間の投獄を宣告され、エマ・ゴールドマンの孜々たる弁護により刑期十四年になる。彼は彼女といっしょに逮捕され、一九一九年ソヴェト・ロシアに追放される。一九二二年十二月、クロンシュタットの弾圧とファニー・パロンの処刑後、彼はロシアを去ってドイツに、ついでフランスに行く。病をえ、ニースで自殺する。著書に、『アナキストの獄中回想』、『ボリシェヴィキの神話』（岡田丈夫訳、太平出版社）があり、ともに英語で出版されている。

Alexandre M. Schapiro (1883—1947) あるロシア・アナキストの息子。一九〇七年のアムステルダムでのアナキスト国際大会の後、国際アナキスト・ビューローの書記（Ⅱ巻四二ページを見よ）。ロシア革命中は、ヴォーリンとともに『ゴロストルーダ』の編集者となり、また対外人民委

員会の一員となる。ボリシェヴィキのアナキスト弾圧のため、一九二二年ベルリンに移ることを余儀なくされ、その地で亡命ロシア・グループを鼓舞する。ついでパリに行き、そこで『サンジカリストの闘い』に協力し、のちアメリカ合衆国に移った。

Aaron Baron アナキスト、一九〇五年革命に参加し、ついでシベリアに流刑、脱走して合衆国にたどり着き、一九一七年再びロシアに帰る。ヘルコフでヴォーリンとともに新聞『ナバート』を編集。一九二〇年十一月、ファニー夫人といっしょにチェカに逮捕される。監獄および収容所に一九三八年まで留置。その後再び逮捕され、死亡。ファニー・パロンは一九二二年九月、ボリシェヴィキに銃殺される。

ヴォーリンの伝記については、Ⅱ巻一二三ページを見よ。

口幹訳、三一書房）——サンティリヤン『革命の経済組織』（一九三六年）。Ⅱ巻一一〇—一一一ページ参照。

『叛逆者の言葉』より抜萃。

アメリカに建設されたカベのそのような共產主義的共同体のあてこすり。カベについては、本書一二七ページを見よ。

Auguste Blanqui (1805—1881) 偉大な革命家、少数者独裁の主唱者。

ルイ・ナポレオン・ボナパルト（ナポレオン三世）は、一八五一年十二月二日、クーデタによって政権を掌握した。Thadée Kosciuszko (1746—1817) 一七九四年のポーランドの著名な独裁者。

一七九四年五月三十日に公布された五月七日の法令。もしこの法令が実施されていたなら、実際に債務奴隷制と世襲裁判制の廃止となっていたのである。（クロボトキン注）

シムールダンとはヴィクトル・ユゴーの小説『九三年』（一八七三年）の主人公。——クロボトキン『フランス大革命』（一九〇九年）、ダニエル・ゲラン『第一共和制下の階級闘争』（一九三二—一九三七年）（新版、一九六九年）を参照せよ。

ジョージ・ウドコック、アヴァンガードモダニチ『ビョートル・クロボトキン、アナキスト公爵』（フランス語版、一九五三年）

Georges Brandaes (1842—1927) デンマークの著名な文芸評論家。

クロボトキンは、一九一四—一九一八年の戦争中、「十六人宣言」の名で知られる宣言で、中欧帝国に対抗して西欧帝国主義に加担した。アナキズムの根本諸原理のこの否認

は、無政府共產主義者たちから非難された。Ⅱ巻四五ページを見よ。

Alexis Kolchak (1874—1920) ロシア白軍の提督、ボリシェヴィキに敗れ銃殺された。——Anton Denikin 將軍 (1872—1947) ロシア白軍の將軍、ボリシェヴィキに敗れた。

Owen については本書一一八ページ、Saint-Simon については本書一一七ページを見よ。Charles Fourier (1772—1837) フランスの「ユートピア」社会主義者、ファランステール派の創始者。普遍的調和の理論家。

『ル・リベラルテール』紙、一九二二年一月二十八日号より抜萃。

エマ・ゴールドマン『わが生涯を生きる』（一九三四年）より抜萃。Emma Goldman (1869—1940) ユダヤ系ロシア人。一八八六年合衆国に移住し、そこでアナキストとなる。婦人の権利、産児制限、個人の自由および性的自由の闘士として雑誌『母なる大地』その他を刊行し、その後嘆息すべき回想記『わが生涯を生きる』を著わした。一九一九年、反アナキスト・ヒステリーの絶頂期に、彼女は合衆国からソヴェト・ロシアに追放された。彼女はロシアに、クロンシュタットの叛乱（一九二一年）が起こるまで留まっていた。ついでヨーロッパとアメリカに帰り、文筆・講演に孜々として活動をつづけた。一九三六年にはスペインにおもむいた。

サーシャとは Alexandre Berkman (1870—1936) の親しい呼名。彼もまたユダヤ系ロシア人で、一八八八年合衆国に移住した。一九二二年ピッツバーグで、職業的スト破りとの闘いでスト労働者を支持し、鉄工業の大立者（ヘン

Daniel Guérin

NI DIEU NI MAÎTRE

ANTHOLOGIE DE L'ANARCHISME I

© François Maspero éditeur, 1970

This book is published in Japan by arrangement
through the Bureau des Copyright Français, Tokyo

ダニエル・ゲラン編

神もなく主人もなく アナキズム・アンソロジー I

©1973

定価 1600円

1973年6月15日 初版印刷

1973年6月20日 初版発行

訳者 長谷川 進

発行 株式会社 河出書房新社／中島隆之

東京都千代田区神田小川町3-6 電話(東京)292-3711 振替東京10802

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

1030-057307-0961

落丁・乱丁本はお取替します